

# 遺言

脚本担当 市川清文

## 【キャスト】

柏木典禅(大禅の長男)・・・大原	田川(ラッキーファイナンス社長)・・・井貫
柏木礼禅(大禅の次男)・・・石塚	森山(ラッキーファイナンス社員)・・・立松
柏木法禅(大禅の三男)・・・藤井	亀山弁護士・・・・・・・・・・鈴木(康)
柏木ツヤ子(大禅の妻)・・・村上	(声のみ)
近藤華枝(大禅の長女)・・・大島	友愛興業社長竹中(典禅の債権者)・・・市川
柏木茉莉子(法禅の妻)・・・高橋(葉)	
斎藤(地域振興会会員)・・・高綱	
木村(地域振興会会員)・・・河邊	
今関(地域振興会会員)・・・田久保	

## 【スタッフ】

演出・・・・・・・・市川	照明・・・・・・・・倉淵・石川(英)
舞台監督・・・・・・・・高梨	衣装・メイク・・・高梨
装置・大道具・・・・・・・・山本・石川(英)	小道具・・・・・・・・宮原
効果・音楽・・・・・・・・高梨	記録(ビデオ)・・・修習生
舞台転換助手・・・・・・・・修習生	

## 《プロローグ》

真っ暗な中で幕があく。

遠くから葬式の読経の声が聞こえて来る。段々その声が大きくなるのと合わせて、真っ暗な舞台の中央、やや高い位置に、柏木大禅の遺影が、ベビースポットに照らされて、段々明るくなる。その余は真っ暗。読経の声が最大になり、遺影の輝きが最大になると、読経のみ、若干大きさが絞られ、その代わりに、葬式参列者たちのざわめきが聞こえ、ややあって、ひそひそと交わされる参列者たちの会話が聞こえて来る。舞台は、遺影をのぞいて依然真っ暗である。読経の声は、依然、中位の音量で続いている。

以下、参列者たちの、殊更にひそひそ声の会話。しかし言葉ははっきりしている。

木村 いやあ、驚きました、斎藤さん。

斎藤 こりゃどうも、木村さん、御苦労様です。しかし、本当ですなあ。いくら高齢とはいえ、つい先日まで地域振興会の第一線で元気に指揮を執っておられた、あの柏木さんがなあ。

木村 惜しい人を無くしたもんです。地域振興会も《自然の村》も、これまで柏木さんひとりで引っ張って来たようなもんですから、柏木さん亡き後、どうして行くのか、こりゃ心配です。

斎藤 人によっちゃ、ワンマンなんぞと陰口をいう人もいるが、やっぱり、いざ柏木さんに死なれてみると、余人をもって代え難いところがありましたよ。

木村 今更ながら、残念なことです。地域振興会をどうするかも、いろいろ考えなくっちゃ  
なりません。

斎藤 本当にそのとおりです。

今関 あ、斎藤さんに、木村さん、御苦労様です。何もお手伝いできなくて申し分けありません。

木村・斎藤 ああ今関さん、御苦労様です。

今関 いや、びっくりしました。なんですか、突然、倒れられたとか。くも膜下出血だそうですね。お年は七七でしたが、あんなに元気だった人がねえ。

木村 そうなんですよ。それでね、ここの地域振興会だって、いままで柏木さんひとりで頑張ってきたようなものですからね、これからどうなるか、心配だって言ってますよ。

今関 そうそう、さっき加藤さんも、同じことを言っとられましたわ。今後どうするのかの問題以前に、柏木さんの息子さんたちが、今までどおりに、山を提供してくれるかどうか分らんとか言うてましたなあ。

斎藤 やっぱり、加藤さんもそういつてましたか。あそこは、三男の法禅さんは、跡取って、しっかり者だし、柏木さんを応援していたからいいが、こういっちゃ何ですが、ほかの兄弟たちがねえ。

今関 そうなんですよ。前から、柏木さんの土地を売れとか言って、親子喧嘩までしていたでしょう。長男の典禅さんなんか、《自然の村》運動のことは、かなりひどいこ

と言ったらしいですから。柏木さんが提供されていた山だって、どうなることが分かりませんし・・・。

木村 柏木さんがいいお人だっただけに、何か、お気の毒ですなあ。地域振興会も自然の村運動も、ようやく花が開きかけて、これからという時ですしねえ。

斎藤 全く、柏木さんもかわいそうな人です。

今関 本来なら大往生というのに、何かしら、とても寂しい気持ちというか、残念ですねえ。

読経の声大きくなり、やがて次第に遠ざかって行く。真っ暗な中、柏木大禅の遺影だけが照らし出されている。

やがて読経の声、聞こえなくなる。

#### 【第一場】

舞台、遺影が残ったまま、溶明。

中央に柏木大禅の遺影がそのまま掛かっている。柏木大禅の家の居間である。舞台やや上手に応接セット。仏壇の上に、《自然の村》と書かれた木製の表札がお供えがわりに上がっている。

遺影の下に設置されている仏壇に向かって、柏木大禅の妻ツヤ子（七一才）が手を合わせている。仏壇には、真新しい位牌と白い入れ物に入った遺骨が祭られている。

チーンとカネをならし、再び手を合わせてから、思い出したように下手へ去るツヤ子。

ややあって、遠くの話声が近づいて来る。

柏木典禅（声のみ）

電車に乗り遅れちまってね。これでも結構忙しいんですよ。お客がなかなか、帰ってくれないもんでね、電車が出ちゃったんですよ。

典禅が姿を現す。大禅の長男、五一才。背広姿。ソファにドッカと座り込む。ツヤ子は、典禅の薄っぺらなカバンを持って、その後から続く。

典禅 北海道の開発の仕事が急ピッチなもんで、いろいろ準備があつてね。おっと、法禅はまだかね。学校の先生は、子供相手だから楽でいいよなあ。親父も結構浮世離れしていたけど、法禅も親父そっくりなところがあるよ。親子二代に互っての先生の世間知らずって訳だ。おっと、これは法禅には内緒だよ。あははは。

ツヤ子は、典禅の話に関わり無く、カバンをソファに置くとそのまま下手に引っ込み、ややあつてお茶を運んで来る。ツヤ子は、悲しそうに押し黙っている。この間、典禅は勝手にしゃべっている

典禅 それでね、電話でもちょっと話したけど、いい霊園が当たったんですよ。広くつてね、富士山も真ん前にこんなに大きく聳え立っていて、見晴らしは最高なんだ。競

争率が高くてね、みんな狙ってたんですよ。苦労したなあ。ははは。まあ、今までの墓とは比べものにならないなあ。それにね、永代供養してくれるから、お寺さんとのめんどろな付き合いも要らないしね。まあ、これからは、無宗教な人間が多くなるんだから、ああいうのが増えるってことかな。

法禅の妻茉莉子が、下手から登場。ツヤ子になにやら耳打ちする。

ツヤ子 華枝が来たそうですよ。(といて、下手へ退場する。典禅はうなづく)

華枝 (しゃべりながら登場。柏木大禅の長女で四八才。嫁いで近藤姓を名乗っている。) あら、兄さんひとり。法禅さんもまだ帰ってないんですってね。あーあ。ここまで来るの、結構大変なのよ。

(と言いながらコートを脱ぎ、お供えを上げ、勝手に仏壇に向かって線香を挙げる。カネの音)

典禅 (華枝が線香を挙げるのを見て自分も立ち上がる)どれ、それじゃあ、俺も線香でも挙げるか。

華枝 あら、兄さん先に来てたのにまだお線香も挙げて無かったの。

典禅 みんなが来てからと思ってただけど、まあ、礼禅も来そうもないし、先に線香挙げちまおう。

華枝 礼禅さんには、連絡取れたの。

典禅 ああ。一応連絡だけはしてもらったよ。あいつが来ると、まとまるものもぶっこわれちまうが、ま、一応、弟だから、声をかけない訳にもいかんよ。(お線香を上げ終え、遺影を見上げながら)この親父ともいろいろあったけど、まあ、死んじまえばどうということも無いなあ。

華枝 どういうことよ。

典禅 いや、人間なんて、アッケ無いもんだってことさ。

ここで柏木大禅の三男・法禅が下手から登場。法禅は、末子で中学校の教師をしている。四〇才。ややあってツヤ子がお茶をもって来る。その後、ツヤ子は、お茶を入れ終わって下手に引っ込んだあと、再登場し、舞台下手寄りの炬燵に座り、編み物を始める。

華枝 (目ざとく法禅に気付き、声をかける)あら、法禅さん、遅かったのね。

法禅 遅くなりました。お待ちいただいたそうで恐縮です。(ソファに座る)

典禅 まあいいさ。俺もさっきついたばかりだ。

法禅 子供の進路指導で忙しいもので……。ところで兄さん、今日は皆に相談したいことがあるって、一体なんですか。

典禅 なんだ、もう本題に入れていいのか。相変わらずせっかちなやつだ。ははは。ま、実はな、今日はちょっと耳寄りな話があってな(と、霊園案内のパンフレットを出す)。これなんだが、どうだ、良いだろう。(と得意げに見せる。華枝は横から覗き混む)

華枝 あら、これ富士多摩霊園のパンフレットじゃない。まさか、兄さん、これ抽選に応

募したの。

典禅 そのマサカさ。それでなんと当たってしまった。

華枝 あらあ、いいわねえ。あたしも近藤の両親と一緒に墓じゃ嫌だからって、ウチからも便利だし、近藤に申し込ませただけで、当たりっこ無いわよ。でもよく当たったわねえ。これ、今回の募集が少なくって、競争率が確か一七倍くらいだったでしょう。

典禅 まあ、この霊園なら無宗教でも入れるし、永代供養もしてくれるから、今、大はやりさ。これからは、墓はドンドンこういう形式になっていく。親父の納骨も近いんで、今の内に準備しとこうと思ってな。

華枝 でも、これ結構、高いのよね。確か権利を買うだけで二〇〇万円。あと、墓石にもお金かかるし……。うちだって申し込んだのは良いけど、当たっちゃったらどうしようかなんて言ってたのよ。兄さん、お金の方、大丈夫だったの。

典禅 ばか。これは親父の墓なんだ、親父の遺産の中からそれくらいは幾らでも払えばいい。

華枝 なんだ、お父さんの遺産からか。

法禅(黙って聞いていたが突然口を挟む)

しかし、お墓ならここに先祖伝来のがあるじゃありませんか。どうしてそんな富士山の遠くの霊園に申し込んだりするんですか。

典禅 いや、あんな親父だったけど、やっぱりこんな田舎のさびれた墓よりは、景色のいい所へ入れてやりたいというのが人情じゃないか。ちっとは死んだ親父のことを考えてやれよ。

法禅 そうですか。ぼくはそうは思いませんけど。お父さんは教員をやめられてからも、ずっとこの夷隅のことを考え続けて来たんです。地域振興会を作って、自然の村運動の先頭に立って村興しを進めていたんです。死んだら、真っ先にこの村に埋めてやりたいと思います。

典禅 ま、それは法禅のいうことも分からないではないけど、将来的にみても、この富士多摩霊園を買っておいて損はないと思うがね。しかし、法禅がどうしてもというのなら、墓については法禅の希望を聞いてやってもいいとは思っているがね。

だが、親父のやって来たことだって、俺に言わせりゃ、世間知らずの一人よがりさ。そりゃ、地域振興もいいさ。自然を生かして山の中でキャンプ張ったりするんだっていいさ。そんなことをとやかくいうんじゃない。ただ、そんなことが事業として成り立つ筈がないってことさ。実際問題として、あの山だって、ほとんどが柏木の山だ。親父が提供して使わせていた訳だろう。地元じゃ、一部の人間はありがたがっているようだが、外の人には笑ってるよ。武士の商法じゃないが、教員あがりの夢物語ってな。

法禅 やめて下さい。いくら兄さんでも、言っていることと悪いことがありますよ。

華枝 まあまあ、ふたりとも、何を急にムキになって。そんなことどうでもいいでしょうよ。それより、兄さん、遺産分けの話するんじゃないか。

典禅 (イラだちを隠さず)だから、してるんじゃないか。

法禅。俺は、はっきり言って、自然の村だかなんだか知らんが、ああいうバカげた

ことに遺産を委ねることは全く考えていない。まあ、この家はお前が建てたものだから、この土地はお前と母さんに遺すとして、それ以外の山林と証券類は全部処分して分けようと思ってるんだ。

いつの間にか、茉莉子がツヤ子と同じ炬燵に入って応接間の話の聞いている。

典禅 お前には悪いが、俺はこんな田舎にくすぶっているのが嫌で家を出た人間だ。親父との衝突もこの点にあった。ま、しかし、今でもそれが間違っていたとは思っていない。第一こんな田舎に将来の展望がもてる筈もない。人間、思い切った決断が必要なこともある。いつまでも、古いものにしがみついているは駄目だ。はっきり言うておくが、そういう意味では、今回の遺産分けでは、それぞれの取り分にしがってきちんと分けてしまおうと思っている。山林が三町歩、それに証券類もある筈だ。こんな田舎だが、買ってくれるという人もいる。チャンスを逃すと、なかなか次が来ないもんだ。

華枝 そう。法禅さんには悪いけど、私もそう思ってるの。私みたいに結婚してしまうと、やっぱり、今では近藤の家の人間なのね。柏木の家は立派に守って行って欲しいとは思うけど、やっぱり今風に、きちんと分けるべきものは分けた方がいいと思うのね。

法禅はだまっている。下手奥でガタガタいうもの音。

茉莉子 どなたかしら。(茉莉子は立って出て行く)。

しばらくの沈黙の際も、奥では何やらがやがや人声。と、突然、下手から礼禅が現れる。礼禅は酒に酔っている様子。ラフな格好。

礼禅 こりゃどうも、皆さんお集まりで。ああ、法禅、電話ありがとう。しかし、よく電話が繋がったもんだな。お前は運がよかったよ。(炬燵のツヤ子のそばにしゃがんで)お母さん、どうも。その後、リューマチの方はどうですか。からだ、大事にしてくださいね。あっと、兄さん、どうも遅くなっちゃいました。姉さんも。(と、立って行って、典禅、華枝の方に頭を下げる。典禅・華枝は無表情で、うなづく)夕餉に待ち人来たりぬ。勇んで迎えれば、ああ、我が待ち人はいずこの人にあらんや。

(礼禅は、ソファに座らず、コタツに入ってしまう。)

ああ、ゴメンなさい、ぼくに構わず話を続けて下さい。

典禅 礼禅は相変わらずだなあ。まあ、ものにこだわらずに、礼禅のように極楽蜻蛉の生活が出来るのも、人徳なのかも知れんよ。

ところで、礼禅じゃないが、さっきの話を続けよう。

まあ、お前も、全く考えていなかった訳じゃないだろうが、そういうことだ。私の

知り合いで、山を買ってくれる人がいるから、今度会わせてやろう。華枝もいいね。  
(華枝はうなづく)

礼禅、実は、お前の来るまでの間にな、この際、遺産の内、山と証券類は全部処分してきちんと分けたほうがいいだろうという話をしていたんだ。

礼禅 (うなづく) ぼくは、みんなで決めてもらえばそれでいいですから。

典禅 そうか。

それから分け方なんだが、母さんと法禅は、この屋敷に住む以外ないだろうから、ここの敷地をやる。ま、宅地だし、一応三〇〇坪もある。山林なんかとは比べものにならない、一番価値のある遺産だ。だから後は、残った兄弟ということになるが、山林と証券類を処分したもののうち、半分は、長男である俺がもらう。残った分を華枝と礼禅で分けることにすればいい。

華枝 ちょっと待ってよ、どうして兄さんが半分も取っちゃう訳。さっき、きっちり分けようって言ったばかりじゃない。

典禅 馬鹿。物には道理ってものがあるんだ。跡を継ぐ長男に全部遺すのが当たり前なんだが、時流の流れに乗って、お前たちにも分けてやろうと言ってるんじゃないか。それに、お前は近藤家に嫁いで柏木を去った人間だ。そういう人間は近藤の遺産を継げばいいんであって、柏木の遺産を継ぐこと自体、道理に合わないということもあるんだぞ。

華枝 冗談じゃないわ。兄弟平等だってというのが、今の常識です。それに、この間、ラジオの法律相談でもやっていたけど、結婚して姓が変わったなんていうのも、遺産分けには関係ないっていうじゃありませんか。今時長男風吹かせるなんていうのは、全くおかしいわ。

典禅 ま、その点は後でじっくり話せばいいことじゃないか。(まずいことになってきたため、話をそらそうとする)

華枝 後じゃ困ります。いい、法禅さんもちゃんと聞いていてちょうだい。あたし、兄さんから遺産分けについて連絡を受けてから、いろいろ弁護士さんに相談してみたのよ。そしたら、兄さん。兄さんが五年前にお父様から戴いた分は、相続分から差し引かれるっていうじゃありませんか。そうでしょう、兄さん。

典禅 何を馬鹿な事を言っているんだ。馬鹿も休み休み言いなさい。親父がいつ、俺のためにお金を出したというのだ。何を根拠にそんなことを言っているのか全くわからん。

華枝 兄さん。わたしが何も知らないとでも思っているのね。いい、お父様は、昭和六一年三月二日に、典禅さんの事業資金の借金の穴埋めに、金八〇〇万円也を支出した。これをわたしはお父様から聞きました(文書を読み上げるように)。というよりも、正確に言えば、知ってしまったと言った方がいいかしら。あるところから聞いたんで、お父様に確認したら、お父様は、否定せず黙っていました。わたしも、それならそれで、お父様はお父様なりに色々考える所もあったんだろうと解釈して黙っていたんです。あんなにお兄さんと衝突していたお父様が、敢えて出したとすれば、よっぽど考える所があったんだろうって。分かった? こう言うのを特別受益というんですってよ。弁護士さんに聞いたわ。外の相続人とは違って特別に利益

を受けること。この特別受益は、その分について既に遺産分けを受けたと同様の法律関係になるんだそうよ。つまり、兄さんは、この八〇〇万円を差し引いた残りしか貰えないということなんだわ。

(典禪は、黙って床をにらみつけている)

分かってらっしゃるでしょう。あーあ。わたしもこんなこと言いたくなかったんで今まで黙っていたのよ。でも、兄さんが半分取ってしまうなんていうから、言ったまでよ。

(一瞬沈黙が訪れる。気まずい時間が流れる)

典禪 (ゆっくりと) 華枝も、親父から結婚資金を出して貰っていたなあ。派手好きなお前が選んだキンキラキンの結婚披露宴と、新居の資金を出して貰っていたなあ。あれは俺が出してやるように親父に言ったんだよ。合計五〇〇万円は下らなかった。あれも、もちろん特別受益だろうよ。外の人には無い利益を受けている訳だ。そうだ、二人が二人とも特別受益を貰っていたとなると、はたしてこの特別受益は一体どうなるんだろうなあ。ははは。

華枝 あれはもうずっと前のことじゃないの。冗談じゃないわ。あたしが結婚したのは、もう二〇年ちかくも前のことよ。そんな前のが特別受益になるっていうのなら、子供のころ、お父様に高校の学費を出して戴いたとか、赤ちゃんの時にミルクを飲ませて戴いたことも特別受益になるっていうの。冗談じゃないわ、馬鹿馬鹿しい。いいかげんなこと言わないで下さいな。

典禪 だから、俺が言い出したんじゃない。特別受益なんぞと言うことはお前が言い出したんだ。とにかく、残った遺産の半分は長男である俺が貰う。分かったな！

一瞬静まり返る。華枝は何かを言おうとしてやめて下を向く。しばらく沈黙。と、黙っていた茉莉子が突然口を開く。

茉莉子 わたしが口を挟むのはおかしいかも知れませんが、証券類は、お父さんの指示で、全部解約して、自然の村運動に投資しています。あなた(と、法禪に声をかける)。自然の村運動の債券のこと、お兄さん、お姉さんにご説明しないと・・・。

法禪 (さえぎるように) 兄さん、姉さん。実は、みんなに言うておかなければならないことがあります。お父さんは、自分が死んだ後のことを心配して、遺言を作ってたらしいんです。

華枝、典禪、そして茉莉子もいっせいに法禪を見る。

法禪 つい一年半前のことでしたが、遺言を作られました。これを知っているのはお母さんとわたしだけでした。何かしら感じるものがあったのかも知れませんが、お一人で遺言を作られた後で、わたしとお母さんにそのことを打ち明けたのです。公正証書の遺言です。お父さんは、自分が死んだら、その公証人のところへ知らせ、遺言を見せてもらうように言われました。先日、私は、公証人役場へ出掛けていき、お父さんが亡くなったことを報告して来ました。



典禪 (さえぎるように怒鳴る。)ちょっと待て。冗談じゃ無いぞ。一体どんな遺言があるというんだ。地域振興会に全部やっちまうとか、法禪が独り占めするとか、そんな遺言など認めんぞ。ふざけるんじゃない!

法禪 まあ、待って下さい。先日、わたしは公証人の所へ行って、お父さんが亡くなったことを報告した所、公証人の先生は、お父さんから頼まれているとあって、私に遺言書の謄本を渡してくれました。これがその公正証書遺言です。(とって引き出しから遺言書を取り出す。典禪はそっぽを向いてしまう。華枝はじっと法禪を見ている。)

法禪 私も先日初めて見たばかりです。読みます。

一 遺言者はその遺産の全部について、これを妻柏木ツヤ子(大正八年十一月三日生)と三男柏木法禪(昭和二年一月七日生)に、持ち分各二分の一宛相続させる。

(典禪は、顔を挙げて法禪を睨み、何か言おうとしてやめる)

二 長男典禪、長女華枝、次男礼禪には、既に生前に、結婚・生計の資金として相当額を贈与してあるので、相続させない。

(典禪が興奮して法禪のもっている遺言を引ったくるようにして目を通す。見ている内に、怒りでわなわな震え出す)

典禪 何を血迷ったことを。ふざけるんじゃない。冗談じゃない。(段々声が大きくなる)こりゃ誰かがでっちあげたもんだ。そうに決まってる。いい加減なこと書きやがって、「母さんと法禪が全部」だと~。冗談じゃない。俺の目は節穴じゃないぞ!こんなものは出鱈目だ!(遺言書を投げ捨てる)

華枝 (思い詰めたように遺言書を拾いあげ、じっと目を通す。ややあって)私と兄さんや礼禪さんには何もくれないっていうのね。贈与してあるって。贈与!私なんか、何貰ったっていうのよ。結婚の時に、もう二〇年も前にもらただけじゃない。そりゃ兄さんはいいわよ。八〇〇万円も出してもらったんだから。私はどうなるのよ、ひどいじゃない、ひどいじゃないの(泣く)。

法禪 全部と言ったって、この家の敷地と、後は地域振興会に無償提供している山林です。それと、以前あった預貯金証券類は、お父さんが全部《自然の村》に投資しました。《自然の村》は、二年前に債券方式で資金を集めましたが、その時にお父さんは預貯金を解約し、証券類は処分して、ほとんど全部をこの債券に変えたんです。私は相談を受けましたが、反対はしませんでした。

お父さんが自然の村運動に情熱をかけていることは、この村の人で知らない人はありません。お父さんが引っ張って来た運動でした。もう少しで、採算が取れるところまでこぎつけようとしていたのです。

ですが、今は債券をお金に変えることもできないと思います。今までかけたお金は、運動の中で、目に見えない財産に変わってしまっています。お父さんは、この運動を継続発展させて欲しいという気持ちで、お母さんと私に、山などを託したのではないかと思っています。ですから、お父さんの遺産といっても、事実上、この家の敷地しか無い状態です。

典禅 (怒鳴る)俺はそんなことは認めんぞ。何が地域振興会だ。何が自然の村だ。ふざけるんじゃない。山林は売るんだ。こうなったら、この宅地だって売らなきゃならんな。それしか無いだろうが、みんな売っちまえばいい。ははは。

礼禅 (突然)法禅。俺はその遺言どおりでいいよ。親父の気持ちもお前がいうとおりだろう。親父の遺志をしっかりと継いでやってくれ。茉莉子さん。済みませんがお酒ないですかね。(茉莉子、うなずいて炬燵から立つ)

典禅 (法禅を睨みつけ)遺言だか何だか知らんが、俺はそんな小細工には騙されんぞ。ははは。そうだよ、全部売っちまえばいいんだ。皆で仲よく分けよう。俺は長男だから半分もらうわ。後は文句は言わん。皆で好きなように分ければいい。そうしよう。あははは。

華枝 (顔を上げ、必死に)何で兄さんが半分なんです。(典禅に近づき)兄弟平等に分けるのが当たり前じゃないですか。平等ですよ(と継りつきそうになる)

典禅 (華枝を振り払うように頬を叩く)ええい、うるさい！！

突然、舞台が暗転し、真っ暗になる。一瞬の間をおいて、読経の声が聞こえて来る。同時に、真っ暗な中、大禅の遺影がぼうっと浮かび上がる。読経の声と遺影のみが、舞台を包む。

この間に、舞台は転換。

下手に典禅の事務所の典禅の机。机上に電話機がある。机と背景のみ下手袖より引き出す転換。

上手の応接セットはそのまま、背景のみ変更して華枝の自宅応接間を作る。

転換終了後、読経の声は遠ざかり、同時に遺影が薄暗くなる。

## 【第二場】

読経が聞こえなくなり、遺影が消えると同時に、下手、典禅の事務所の机上で、けたたましい電話のベルの音。

下手の典禅の事務所が、スポットの中に浮かび上がる。典禅が座っているが、電話に出るのをためらう風情。五回ほど鳴ってからようやく電話に出る。

典禅 (意を決したように)はい、柏木商事です。

竹中(友愛興業社長。竹中の声はスピーカーから聞こえる)

(一瞬、間をおいて、ゆっくり)柏木はんか。友愛興業や。友愛興業の竹中や。

典禅 (極度に緊張したように)ああ竹中さん、どうもいつもご迷惑かけています。

竹中 ご迷惑なんてもんじゃないよ。一体どうなっとるんやね、あんたの会社は。ええ？何回電話したって社長は居ない、電話くれつつうても電話は来ない。人間にはなあ、あんた、我慢の限界つつうもんがあるんやで！

典禅 本当に申し訳、ございません。いろいろ、取り混んでいたものですから。それに、竹中さんとのお約束の件が、ありましたものですから、なんとか、お約束を果たすために、いろいろ努力していましたんですが。

竹中 言い訳は、やめまひょうや。それに約束守るのは、あんた、当たり前のことですよ。え？ とっくに守ってもらってなくっちゃあならん約束が、いまだに果たされておらへん。あんたが頭下げて、今度だけですからつつて、何回、ワイんところからお金もって行きましたかいな。(典禪は、竹中の一言々に、「はあ」とか、「そりゃもう」とか「いえ」とか、緊張した声でボソボソ答えている)。その度にワイがどんなに無理して、あんたのために都合してやったのか、あんた、ちっとは考えたことあんのかいな。いいか。あんたなあ。人間には、我慢の限界っちゅうもんがあるんや。堪忍袋っちゅうのは、いつか緒が切れてしまうんじゃ。分かってんのかいな！

典禪 本当に申し訳ございません。竹中さんには、これ以上ないほどの御恩を受けていることは、肝に銘じて承知しております。この御恩は、柏木典禪、一生かけてもお返ししなければならぬものと考えております(電話の前で盛んに恐縮して汗を拭いている)。

竹中 一生なんてかけて貰らわんでもいいんや。柏木はん。ワイはな、今すぐに返して貰いたいんや。あんなあ、あんたはんにお貸ししたお金なあ、ワイ、今すぐに返して貰いたいんや。今すぐや！

典禪 はい、そりゃもう、よく分かっとります。ですから、いろいろ走り回って、お電話もできなかつた訳です。

竹中 (さえぎって)もうええわ！あんたの言い訳は聞き飽きたんや。どうやね、それであんたの言っていた、おやじはんの遺産はどないなつたんや、ええ？ おやじはんの遺産があるから大丈夫なんぞと大見えきつたんは、あんたやで。ワイは、「それじゃあ、目えつぶって柏木はんを信じるさかい、騙さんでおくれやす」というて、あんたに、お金出したなあ？ どや、柏木はん、まさかあんときのこと、ワイをオチョクッタんとは違うなあ？ ええ？

典禪 そんな、竹中さんを騙すとか、オチョクルなんて滅相もございません。竹中さんにはお世話になりっぱなしで、本当に感謝しております。

竹中 (さえぎるように)じゃあ、いつ払ってくれるんや。ワイもなあ、この頃、年の所為で大分、気が短こうなってきたなあ、支払い期限を一〇回も延期されると、そろそろ爆発しそうなんや。そや、それじゃあ、明日でもワイの事務所の方に、もって来てくれんかいな。今日はもう、遅いから、明日でええだろう。そうしよう。それじゃあ、明日の朝九時キツカりにワイの事務所や。ええな。

典禪 はあ、そりゃもう。それで、実は、ひとつお願いがありまして。

竹中 なんや。

典禪 実は、おやじの遺産のことなんです、いろいろありまして、ちょっとまだ、現金というところまではなっていません。

竹中 (さえぎって)何言うてんのや。あんたはんのおやじはんが死んで、もう四カ月も立っとるんやで。いくらなんでも柏木はん、いい加減にせんかいな。

典禪 はあ、そうなんです、まあ今時は、土地を処分すると言っても、右から左に売れるものではありません、それに田舎の山林なもんですから、買い手を探すのもひと苦労ありまして。

竹中 (さえぎって) 柏木はん。ワイはなあ、あんたはんの言い訳は聞きとうないんや。とにかくな、ワイは、もう待てへんで。あしたや、明日が期限や。明日の朝九時キツカリにワイの事務所に来とくれや。詳しい話はそんときや！！

ガチャンと電話が切られる。呆然として、しばらく受話器をもったまま佇む典禪。やがて静かに受話器を置く。

その後、静かに溶暗。

### 【第三場】

ややあって、今度は上手の華枝の自宅の応接間が溶明する。

ソファーに二人の客が座っている。ラッキーファイナンスの社長(田川)と社員(森山)である。田川はサングラスをかけ、森山はパンチパーマの一見ヤクザ風。華枝は、脅えたようにお茶を入れている。森山らがしゃっべっている間、じっとうつむいている。

森山 要するに、おやじさんの遺産から返すという話は、なかなか困難だつうわけね。(家を見回しながら)この家も全部抵当に入っちゃってるし、全く、困ったもんだ。借りるときは拝み拝み、借りた後はもう少し待て待て。一体、いつまで待てば良いんだらうね。(華枝はだまったまま)  
(アタッシュケースから、紙切れを取り出して広げ、ゆっくりと読む。)  
《念書。私がお借りしています金三八〇万円(利息別途)は、父柏木大禪の遺産の中から間違いなくお支払い致します。遅くとも三月一五日までには全額お支払い致します。よって、本念書を差し入れます。  
平成三年一月二〇日。近藤華枝。ラッキーファイナンス御中》。  
(溜め息をついて)今日は三月二三日。  
なかなか連絡が取れないんで来てみたら、「お父様が遺言を作ってあることが分かり、私にはくれないと書いてあった。」全く困ったもんですなあ。

華枝はじっと押し黙って下を向いたまま。社長の田川は、サングラスの奥から華枝をじっとニランでいる。森山は、念書を仕舞うと、別の二、三枚の紙を出す。

森山 借入申込書。氏名近藤華枝。自宅改装のため。金額一三〇万円。  
借入申込書、氏名近藤華枝。自動車購入資金。金額二〇〇万円。連帯保証人。近藤富雄、夫。  
借入申込書。氏名近藤華枝。海外旅行費用。金額五〇万円。連帯保証人。近藤富雄、夫。  
(紙を仕舞いながら)ご主人に内緒だったなんてことを後から聞かされても、うちと

しては困りましたなあ。ラッキーファイナンスも、慈善事業じゃありませんので、貸したお金は返していただかねばなりませんし、借主が返せなきゃあ、保証人に支払って戴かなきゃあならない。全く、困ったもんですな。

(腕時計をチラッと見て)、そろそろご主人が帰って来る時間かな？ どうしましようか。黙っていちゃあ、話が進まないんですがねえ。

華枝 (小声でボソボソと)申し訳ありません。今、兄や弟たちと話し合いをしていますので、もう少し待ってください。もう少し立てば、何とかなりますから。

森山 しかし、山林も証券もその何とか会ですか、道楽みたいな事業につき込んでいっているというんでしょう。奥さんが話をしてどうなるものでもないでしょうが。

華枝 (ボソボソと)それも含めて、今話をしているんです。なんとか、処分して、みんなに分けようって。

田川 (ゆっくりと、しかし有無を言わせぬ調子で)こうしましよう。あんたの借金の支払いのカタとして、ラッキーファイナンスにあんたの相続分を譲渡してもらおう。遺産分割の話は、我々がやりましょう。いくらかでも取れたら、その分の借金は帳消しだ。そうしましよう。

おい(といて、森山を促す。森山はアタッシュケースから一枚の紙を出し、田川に渡す)

これが、相続分を譲渡するという書類です。ま、こんなことは珍しくないんだ。これにサインすれば、当面はあんたの責任はなくなる。ラッキーファイナンスの方であんたの兄弟と話し合うことになる。うまく行けば、あんたの借金は棒引きだ。もちろん印鑑証明書はつけてもらわなきゃならないがな。

森山 まあ無理にとは言いませんが、外に方法はないでしょう。その年じゃあ、どこかで働くっていったって、どうしようもないしねえ。それとも、無理して働くかな。ま、これは冗談ですよ。うちの会社は、貸金業の届出もきちんとしてある優良企業だ。法律的に通用しないことはしない。しかし、法律で許される手続はきちんととりますよ。ご主人の給料を差し押さえたり、もちろんあなたの相続分を差し押さえることもできる。まあ、そうなればご主人に内緒だったのが全部バレてしまう。ご主人との関係だっておかしくなっちゃうでしょう。あれだけのお金を、ご主人に内緒で誰につき込んだのかも全部話さなくちゃならない。そっちの方が大変ですよ。

(華枝は、じっと下を向いていたが、このとき、僅かにコクッとうなずく。森山は、目ざとくこれを見付け)

そう、それでいいんだ。それが奥さんのためですよ。賢明だ。

(といいながら、田川から書類を受け取り、華枝の前のテーブルに置く。ボールペンも取り出して華枝に渡し)

ここに、奥さんの名前を書いてください。住所と名前。

華枝は、文書を手にとって必死に読んでいたが、しばらくして観念したようにテーブルに

置き、名前を書き始める。

そのまま溶暗。

暗い中、舞台中央の大禅の遺影が照らし出され、やがて静かに消える。

真っ暗な中、遠くからふくろの鳴き声。暗い中で幕(あれば中幕)が下りる。この間に、舞台の上では、法律事務所への転換が行われている。

#### 【第四場】

幕(中幕)の前。

下手から斎藤・木村・今関の三人が歩いて来る。スポットに照らされている。中央付近で立ち止まって、立ち話。スポットは、三人の動きにしたがって移動。フクロウのなく声が、遠くで聞こえている。

木村 斎藤さん。私、考えたんですが、やっぱりここは私たちが何とかしなくっちゃあならんと思うんです。(ここで立ち止まる)

法禅さんが頑張っているということですが、法禅さんだけに押し付けとく訳にはいかんのではないかと思うんです。

斎藤 実は私も、そのことを考えていたんですよ。ああいうサラ金のような業者とか、暴力団が入り込んで来ちゃあ、いくら気丈な法禅さんだって、一人じゃ大変だ。

今関 私も同感です。しかし、典禅さんも華枝さんも、随分大金を借りているようですから、そう簡単には、業者も諦めてくれないのではないですか。

木村 そうかも知れませんねえ。典禅さんの方は、利息だとか何だとかで、何でも二〇〇〇万円以上はあるようですよ。

斎藤 私らだって、誰もお金があるわけじゃ無いしねえ。かと言って、このまま法禅さんに押し付けていたんじゃ、《自然の村》だって潰されて、開発業者の手に渡ることになってしまうでしょう。

木村 せっかくここまで進んで来たのが、水の泡です。大禅さんが一人で頑張ってきたからここまで来た訳ですが、しかし、大禅さん亡き後、このまま放っておいたんではいくら何でも後で後悔することになってしまいますよ。ここは、ひとつ、私らが覚悟を決める必要があるんじゃないでしょうか。

今関 本当に同感です。どうしたらいいか、地域振興会の会員で、一度じっくり相談して見ましょうよ。

斎藤 それがいいでしょうね。

三人、再び歩き出す。

斎藤 あした、理事会がありますから、そこで相談してみます。できたら木村さんと今関さんも出席して、意見を言って戴けませんかね。

木村・今関 わかりました。

三人、上手に消える。スポット、三人が消えた後、溶暗。  
真っ暗な中、フクロウの鳴き声がひととき大きく聞こえる。  
真っ暗な中で、幕が開く。

#### 【第五場】

亀山法律事務所。溶明すると、テーブルを挟んで、亀山弁護士の前に、法禅、斎藤、木村、今関が座っている。

亀山 分かりました。

公正証書遺言の場合には、よっぽど特別の事情がない限り、その効力に問題が生じることはないと考えていいでしょう。公証人は、裁判官や検察官を退官されたような法律専門家ですし、遺言の場合ですと、本人の自由な意思に基づくものなのか、誰かから強制されたり騙されたりしたものではないかなど、丁寧に確認します。ですから、こういう公正証書の手続の厳格性から、外の形式の遺言のように家庭裁判所で検認を受けなくてもよいことになっているんですね。

法禅 兄は、偽造だとか色々言っていますが、そういうことに対して、何らかの対策を考える必要はないでしょうか。

亀山 公正証書遺言については、偽造ということは、まず考えられないんです。まあ、別人がお父様の振りをして、勝手にお父様名義の公正証書遺言を作るような場合が考えられますが、その場合でも、最低、印鑑証明書は本物が必要ですので、そこで偽造が防止される。利害関係のない証人もふたり必要です。それに、お父様の場合には、公証人と前からの知り合いだった訳ですから、別人がお父様に成り代わってと言うことは、およそあり得ないといっているでしょう。

法禅 そうですか。

亀山 ところが、もうひとつ問題があります。

先程も簡単に説明しましたが、遺言というのは、必ずしも、その通りになる訳ではないのです。相続人達に、原則としてそれぞれの相続分の半分だけは遺してやりなさいという制度があるんです。そして、仮に遺さなかったとしても、その分は請求があれば返さなくっちゃならない。

これが、遺留分の制度です。

ですから、柏木さんの場合、法定相続分は、お母様が全体の半分、残りの半分を子供が四人で分ける訳ですから、子供一人あたり八分の一ですね。これが法定の相続分です。したがって、遺留分はさらにその半分ということで、典禅さん、礼禅さん、そして華枝さんがそれぞれ一六分の一の遺留分をもっているということなんです。

法禅 礼禅兄さんは、遺言通りでいいと言ってくれていますんで、そうすると典禅兄さんと華枝姉さんの二人併せて、全体の八分の一が遺留分ということになりますね。

亀山 その通りです。

それから、もうひとつ、実はこの遺言の中にも書いてありますが、典禅さんや華枝

さん、礼禅さんは生前に大禅さんから贈与を受けていた、という問題がありますね。大禅さんも、この人達には、これだけやってあるから、もういいだろうということで、相続から外した訳です。ですから、この生前の贈与をどう見るのかという問題があるんですね。

一口に言ってしまえば、こう言うのを特別受益と言って、この分を計算に加えてその人の取り分を決めるとというのが民法の態度です。当然、遺留分を計算する場合にも同じ問題がおきます。

法禅 そのことを典禅兄さんが言うんです。遺留分には、特別受益は関係ない。そうなんではないですか。

亀山 そんなことはありませんよ。

例えば二人兄弟が相続人の場合を考えてみてください。生前にお兄さんが半分以上の財産をもらっていて、遺産は少ししかなかった。こういう場合、お兄さんには特別受益がありますから、お兄さんはもう貰えません。

ところがここで、念には念をということで、「遺産は全部弟に上げる」という遺言をお父様が書いたとしましょう。この場合に、お兄さんが「遺言で除外されたから、遺留分としてさらに遺産の四分の一をよこせ」と言えるのでは、遺言の趣旨と反対になってしまうという奇妙なことになる。遺言がなければ、もちろん特別受益に該当して、既にもらった分以上は貰えなかったのに、あなたには上げないという遺言があると却って貰えてしまうという、おかしいことになりますよ。

法禅 いわれてみればそのとおりですね。(斎藤、木村、今関は、二人の話に盛んに相槌を打っている)

そうすると、兄や姉に対しても、特別受益分、差し引くということも言ってもいい訳ですね。

亀山 その通りです。

法禅 まあ、私も、兄や姉を助けてやりたいという気持ちもあって、何が何でもこうするという気持ちではないんですが、父の気持ちも尊重してやりたいと思っているものから、いろいろ悩んでいるんです(亀山弁護士はうなずいている)。

それで、先程いいましたが、金融業者が相続分を借金のカタに取ったというのは、これはどういう風にしたらいいんでしょうか。

亀山 ええ。自宅の一部をよこせとか言う、無理難題を言っている訳ですね。しかしね、それはいずれにしても、お金で支払えば解決出来るんです。相手は柏木さんを困らせようとしてそんなことを言っている訳ですが、民法は、相続人以外のものが相続分の譲渡を受けた場合、他の相続人はこれをお金で買い取れると言っている。だから現物の一部を取得したいと言っても拒否出来るんですね。それにね、遺留分の請求の場合には、価額による弁償といって、やっぱりお金で解決出来るんです。ですから、自宅に入りこまれるとかいう心配は全く要りませんね。

法禅、斎藤、木村、今関、顔を見合わせて、にっこりうなずき合う。

斎藤 本当にありがとうございます。私ら何だか、勇気が沸いて来た気がします。大禅さんはとっても気丈な人で、ひとりで今の地域振興会を作って来た人でしたが、この法禅さんも、さすがに大禅さんの血を引いて、これまで一人で頑張って来られたん



です。しかし、それじゃあいかんということで、私らも、力不足ではありますが、何とか法禅さんを助けて、地域振興会を守り、大禅さんの夢を実現したいと思っています。

木村 私ら意気地がなかったって、皆で反省しとるんです。役員会でも、全員で頑張ろうと、話し合っています。

今関 ご面倒ですが、手続なんかは先生にお願いしたいんで、後、どうしたらいいか、ご指導戴ければと思うんですが。

斎藤・木村・今関(一緒に)よろしくお願ひ致します。(法禅も頭を下げる)

亀山 分かりました。出来るだけのことはしたいと思います。

それじゃ、まずですね・・・。

(テーブルに覆いかぶさるように話を始める。亀山弁護士は書面になにやら書き込む風情)

舞台ゆっくりと溶暗する。

#### 【第六場】

真っ暗になった頃、舞台中央に、大禅の遺影が浮かび上がる。

その他は、真っ暗なまま。

意味ありげな、懐かしいような、不思議な音楽が聞こえてくる。徐々に大きくなる。

真っ暗な中を、遺影と音楽だけが支配する。

と、しばらくして、舞台下手にスポットに照らし出されて、ツヤ子が立つ。ツヤ子の独白である。音楽は、低いまま、独白の間、流れ続けている。

ツヤ子 そうです。《自然の村》の完成は、主人の長年の夢でした。森の中に、人間が溶け込む。誰にも遠慮せずに、自由に息がつける世界。

長年教員だった主人は、本当は、どこまでも自由に生きる冒険家や、作家を志していました。主人の父親の意向で教員となりましたが、内心、教員生活には、窮屈な思いをしていたようです。

「俺は、人を教育したりすることには向かない、そんなに偉い人間ではない」と、口癖のように言っていました。

教員をやめ、地域振興会に参加して、《自然の村》作りを始めてからは、長年の夢をそこに求めたのでしょうか、子供のように夢中になっていました。全財産を投げ打って《自然の村》の事業に投資し、先祖伝来の山を無償提供し、・・・幸せそうでした。

最初は、主人の行動に対して、選挙にでも出るんじゃないか、などと陰口をいう人もいましたが、いつか村の人達にも理解して貰えるようになりまして。後少して自然の村も完成を迎えようとしていたんです。

完成を目前にして、突然、倒れて(涙声)・・・さぞ無念だったろうと思います。

ひと目、立派な村を見せてやりたかった。

「ツヤ子、後は頼むぞ、自然の村を完成させてくれ」・・・主人がこう言っているのがわたしには聞こえる気がします。

これが、主人の、遺言です。(かみしめるように)

音楽一瞬高くなる。ツヤ子は、独白が終わると、そのまま、静かに舞台下手の椅子に、観客の方を向いて、腰掛ける。スポットはツヤ子を追う。

そのツヤ子に語りかけるように、法禅の声がマイクを通じて聞こえて来る。

舞台中央上部には、相変わらず、大禅の遺影がかかっている。

法禅 お母さん。ご安心下さい。

私も、力不足ではありますが、《自然の村》は何としても守ります。ようやく、そのメドが立ちそうなんです。

先日、弁護士さんのところへ相談に行ったことはご説明しましたね。問題は、典禅兄さんと、華枝姉さんの借金の整理でした。弁護士さんのお話しでは、二人の借金は、利息制限法という法律にしたがって計算し直すと半分近くに減ってしまうそうです。

(ツヤ子は、すわったまま静かにうなづく)

特に、典禅兄さんが借りていた友愛興業という会社は、暴力団とも関係のある悪質な業者だそうで、刑事罰が問題となる程、金利もデタラメなものだったそうです。告訴することも出来るそうですが、とりあえず、裁判所に調停の申立をして、話し合いをしてきました。

弁護士さんのお話しですと、裁判所の説得で、業者は、利息制限法による利息の計算を認めてくれることになったそうです。もちろん、その計算による元利合計をまとめて返さなければなりません。

大丈夫ですよ。自宅の土地建物を担保に入れて、典禅兄さんと、華枝姉さんの名前で銀行からお金を借りるということで、何とか解決出来そうなんです。

私は保証人になります。本当は、銀行ではこういう貸し出しはしてくれないらしいのですが、村の有力者の人達が大変、骨を折って下さいました。お陰で、何とか借りられることになったんです。明日、その契約をして、業者とも会うことになっています。

(ツヤ子は、すわったまま静かにうなづく)

ああ、《自然の村》のことですか。

典禅兄さんや華枝姉さんと話し合った結果、おふたりとも、遺産については、一切遺言の通りでよいと約束して下さいました。これがその合意書です。

(一瞬間をおいて、ツヤ子は手にもっていた文書を、改めて取り上げるようにしてうなずきながら見つめ、それから顔を上げる)

えっ？ 銀行借り入れの返済ですか。大丈夫ですよ。典禅兄さんの事業も、あんな高利さえなければ立派に成功していたはずなんです。返済については、銀行も了解してくれました。万一の時は保証人である私が支払うことにはなりますが、何とか

なるでしょう。

それから、礼禅兄さんには、わずかに残っていたお父さんの預金の中から、現金を渡しました。もちろん、ほんの気持ち程度のわずかなものでしたが、気持ち良く受け取ってくれましたよ。

これで、お父さんにも、安心してもらえるんじゃないかと思います。

法禅の声が遠ざかると、ツヤ子は静かに立ち上がり、舞台中央で、遺影に向かって頭を下げ、線香を上げるしぐさ。線香を上げ終えてから、下手に立ち去る。

舞台には、中央の大禅の遺影だけが残る。

ややあって、音楽ふたたび低く流れる。上手に、椅子に座った典禅が、スポットに浮かび上がる。典禅の姿以外は真っ暗である。

典禅は、法禅との会話のような独白を始める。

典禅 いや、助かったよ。最初からお前に相談すればよかったんだ。人間、この年になっちまうと、なかなか素直にはなれないもんだなあ。いや、お恥ずかしいよ。

俺も堅物の親父が嫌いで、大学まで中退して、好きなことを始めたが、正直、失敗の連続だったんだ。一度、親父に助けて貰ったが、あのときも、みっともないという思いがあったもんで正直なことが言えず、結局、借金の一部を隠しちまったんだなあ。その位なら何とかなるだろうという気持ちと、まあ、事業が成功するという自信もあった。しかし、どこまでも甘ちゃんだった。事業は行き詰まるし、借金は貯まるしで、お恥ずかしいことになっちまった。

しかし、人間、貧すれば鈍するだ。親父が死んで、真っ先に考えたのが遺産のことだったとは。情けないもんさ。頑固な親父だったが、俺も、もっと素直に親父と話し合えればよかったよ。俺は親父のようにロマンチストじゃないが、最近、金の話をするのがだんだん嫌になって来た。醜い遺産争いをした人間が何をいうかとおもってもしれんが、これは本当の気持ちだ。金のために愛想笑いをし、金のために頭を下げ、金のために人を叱り付けたりする。・・・金に振り回されちまう訳さ。

いや、面目ない。お前に継いで貰うのが、親父の本当の気持ちだっていうのは、俺にも手に取るように分かるさ。ははは。

典禅のスポットが溶暗し、音楽一瞬高くなる。

その後、音楽ふたたび低く流れ、舞台、大禅の遺影以外、真っ暗。

やがて、下手、華枝がスポットに浮かび上がる。

華枝 ごめんなさい。あたしも疲れちゃってね。あんな人達に脅されて、相続分を渡してしまったりして。法禅さんがどんなに困るだろうって、心配してたんだけど・・・本当よ。でも、ウチの人にバラスぞなんて脅されて・・・あたしもどうかしていたんだわ。駄目ねえ。本当にだらし無いわねえ。

言ってなかったけど、ウチもあんまりうまく行っていないのよ。ウチの人もあたしも、お互い内緒ごとが多くなって、・・・こんなことで法禅さんには迷惑かけられ

ないって思ってたのに。でも、結局、迷惑かけちゃったわねえ。

突然、上手に礼禅がスポットに照らし出される。下手の華枝もそのまま。礼禅は酔った風情。

礼禅 夫婦(めおと)仲、夫婦別れに、夫婦連れ、か。  
ははは、姉さん。人間、生きていりゃあ、いろんなことがあるさ。  
すべからく、流れるごとく生きるべしってね。  
走っても追いつくもんじゃなし、振り返ってもどうなるものでもなし。  
グチを隠して罪隠し、恥を殺して明日を生き、ってね。  
まあ、気にしない気にしない。はは。

華枝 あなたは良いわねえ。どうしてそういう気持ちになれるのかしら。  
あたしは、いい加減、疲れてきちゃったわ。疲れて疲れて、あんまり疲れると、自分がどうかなっちゃうのね。  
でも法禅さん、本当に助かったわ、ありがとう。この御恩はきっと返させて戴きます(静かに頭を下げる)。

華枝のスポット、礼禅のスポットが、静かに溶暗。舞台中央の、大禅の遺影だけがのこり、やがて遺影も溶暗し、舞台全体、真っ暗になる。

#### 【第七場】

真っ暗な中、遠くから祭囃子が聞こえて来る。真っ暗な中、幕が下りる。  
しばらく真っ暗なまま祭囃子が流れるが、幕が完全に閉まった後、幕の前、下手から、斎藤・木村・今関・法禅・茉莉子・ツヤ子が歩いて来る。  
スポットが全員を照らす。溶明。全員、祭りの帰りといういで立ち。和やかな雰囲気。中

央付近で立ち止まって、立ち話。

今関 いやあ、よかったですねえ。今年は特に若い人が多かった。

木村 本当ですね。若い人、特にあんなに若い女性が村に集まったのも、村始まって以来のことじゃないかなあ。と。こりゃちょっと大袈裟だったかな。

斎藤 いやいや、本当にひさしぶりに活気づきましたよ。自然の村運動もいよいよ本格始動、軌道に乗って来ました。

ツヤ子 本当に皆さん方のお陰でございます。主人もさぞ喜んでいることと思います。本当にありがとうございました。(深々と頭を下げる。茉莉子も)

法禅 私の教えている子供たちも、大分、《自然の村》運動に関心をもつようになって来ています。《自然の村》運動の部活も出来ているんですよ。

斎藤 そうなんですってね。私の甥っ子が言っていました。そうやって来ると、いよいよ《自然の村》の将来像について、村全体で知恵を出し合えるようになる。後は、他所の

人達にどう訴えるかという問題ですな。(皆、笑う)

木村 それにしても柏木さんには、これまで全く無償で山を提供して戴いて、私ら恐縮していたんですが、ようやく少しづつでも賃料をお支払い出来そうでホッとしてるんですよ。

法禅 いやいや、そんな心配しないでください。これは私の父の夢だったんですから。その夢の実現を皆さんにお手伝いして戴いているんですから、こちらがお礼を言わなきゃならないんです。(笑い)

それからですね、あの山は、地域振興会と自然の村の組織整備が終わったら、皆さんにも相談に乗って戴いて、適当な時期に寄付したいって思っているんです。父の遺言をじっと見つめていますと、文字の間に見えて来るんですよ。父がそう言って私に語りかけて来るのが。

今関 こりゃ大変なことになった。そうなったら、いよいよ途中で逃げ出すことは出来なくなりますね。

木村 そりゃそうだ。ははは(全員笑う)。さて、こうしてはられないですよ。キャンプの連中が待っているんです。今頃、あれがないこれが分からないって、大騒ぎですよ、きっと。

法禅 そうですね。それじゃ、ひとつ走りしますか(と、幕の下をもち上げる格好。それと同時に幕が上がり始める。舞台は前のままで、照明も落ちたまま。ここでもスポットだけが唯一の照明である。幕が上がっても、まだ外にいる設定である)。

斎藤 コラコラ、年寄りを置いていかんで下さいよ。

法禅 大丈夫ですよ。置いて行きませんから。(笑い声)

皆笑いながら上手へ去っていく。全員が去ったところで、祭囃子、大きくなり、ややあつて舞台上の照明が全開。終わりであることを示す。

その後、カーテンコール。司会者の紹介で、次々に舞台に現れる。

以 上

千葉県弁護士会会報『槇』91年度第2号所収